
協同総合研究所1991年度事業報告

①協同運動の実践的シンクタンク、②協同の担い手を育てる研究・学習機関、③地域に根ざしたネットワーク型研究所をめざして、この1年間、組織の基礎を固め、自らの基本性格と活動様式を確立するために、奮闘してきました。

会員の熱意ある参加によって、研究所の最小限の基礎を固め、実際の取り組みの中で、基本的な方向を明確にすることができました。

経過を振り返るとともに、研究所の基本性格と課題を再確認します。

I. 経過と到達点

1. 会員の現状と定款検討（組織整備）

会員は、6月13日現在、個人会員216人、団体会員34団体です。

個人会員の地域的分布は、北海道3人、東北8人、関東118人、中部23人、関西35人、中国5人、四国11人、九州10人、沖縄1人です。その他、海外会員として、アメリカ合衆国と韓国から入会していただいています。個人会員のうち、研究者は88人、専門家・実践家124人、学生・院生4人という構成です。

実践家、専門職はもちろん、きわめて実践的なフィールドと問題意識を持った会員が多数を占めていることが特徴と言えます。

団体会員の内訳は、事業団関係12、生協11、農協1、労働組合関係3、教育・文化・福祉3、その他4です。

また、設立総会で指摘された点を中心に、山岡英也、鈴木章、安藤政武、五十嵐利之久の各氏に委嘱して定款検討委員会を設置し、4回の討議を経て委員会案をまとめていただきました。理事会の検討・承認を経て別議案の通り、総会に提案いたします。

2. 基本研究・部会研究

I C A 東京大会に、日本の協同運動の実践と理論を伝えることをめざして、次のように基本研究会を行なってきました。

○佐藤和夫氏「文化の転換と協同」

○中西五洲氏「人類の危機と協同の原理」

○手島繁一氏、菅野正純氏：イタリア・ヨーロッパ労働者協同組合調査報告

○橋本一氏「地域づくりにおける協同と公共」

○石見 尚氏「日本の協同組合運動の新しい波—協同組合地域社会とコミュニティ産業」

○角瀬保雄氏「スペイン・モンドラゴン協同組合を調査訪問して—企業変革と協同組合経営」

また、部会別の研究としては、「福祉・医療と協同」、「廃棄物問題」研究会、「労働組合運動と協同」、「労働者協同組合法制」、地域産業基盤、「中小企業協同化展望」研究会の6つの部会で研究を行なってきました。

両者は、「いま『協同』を問う92集会」に集大成されますが、この要旨を英訳して世界の協同組合人に提起することとします。

3. 委託研究

委託研究では、成立したのは、結局、四国の森林保全問題（委託者：事業団全国連合会、受託者：協同総合研究所四国部会＝代表橋本一理事）だけでした。しかし、この研究には四国の研究者と実践家総勢21人が参加する大掛かりな政策プロジェクトで、参加者はこの委託研究の成果を自費出版し、研究業績を発表しようと張り切っており、その政策提案の内容が期待されるとともに、地方の研究の前進にとっての委託研究の重要性を確認することができました。

4. 地域での活動、他団体との協力

1) 地域での活動としては、

①北海道、広島での協同の懇談会

②第2回長野協同集会への協力

③京都での「協同組合セクターはオルタナティブか」シンポジウム（基礎経済科学研究所、大月書店後援）

④青森での黒川理事長講演

などを行ないました。

とりわけ京都のシンポジウムは、野沢正徳、大西広、成瀬龍夫氏ら関西・京都の研究者と東京の研究者の有益な交流の場となり、協同総研の地域的広がりにも力になりました。

2) 初年度としては、協同総研の存在を知ってもらい、労働者協同組合研究、協同総合研究へのニーズをつかむためにも、次のような、他団体との協力による活動に積極的に取り組んできました。

国労・国鉄闘争支援中央共闘会議主催「国労闘争と労働者協同組合」シンポジウム、菊池陽子・増田アツミ会員らによる「生活文化・地域協同研究会」への協力。京都ごみ問題懇話会、労働運動研究会、四国まつり、関住協・集合住宅維持管理機構研究会、生協と共同作業所の提携活動全国交流会、東京自治フォーラム、北日本林業経済研究会、「民衆のメディア国際交流'91」、生活クラブ「ワーカーズコープ」国際シンポジウムへの各参加など。

また愛知の「人間教育を進める」黄柳野高校の設立準備に対して、黒川理事長が発起人の1人となり、連携をとっています。

人と人とのつながりの中で成果は確実に挙げたと評価できます。広島での懇談会がきっかけとなって、タウ技研・都筑会員とともに、良質な福祉機器の生産・供給の話も交わされています。また、国鉄闘争に対して「地元に一ヵ月だけ雇用」という最悪の中労委和解案が出され、長期闘争に突入したことから、本格的な自活体制＝経営の確立への全面的な支援が協同総研にも期待されています。

5. 来期研究所活動の飛躍への展望ひらいた協同集会

昨年末以来、協同集会の準備に全力を注いできましたが、今回の協同集会への期待と幅の広がり、画期的なものになりつつあります。環境、医療・福祉、教育・文化、地場農林水産業・中小商工業、労働組合のさまざまな協同運動が、「人類の危機と協同でひらく未来」のテーマのもとに一大合流することによって、多様な協同の可能性と今日の協同運動が持っている思想的・文化的・政策的な深みを知りあい、新しい事業・運動のネットワークがひらかれることが期待されます。来期は、協同総研の活動と協同集会の準備を年間を通して統一的にすすめたいと考えます。

6. 所報『協同の発見』の発行

全国の会員の参加の回路として、また研究所活動の記録として、『協同の発見』を昨年9月からほぼ毎月、発行してきました。今年度は、年間統一テーマや部会研究の強化、地域での協同懇談会や集会等を通じて、会員の参加を飛躍的に発展させるとともに、所報と『仕事の発見』誌のいっそうの充実を図ります。

7. 国際活動

生まれて1年たらずの研究所としては法外なほど沢山の国際活動を行なってきました。

事業団のヨーロッパ労働者協同組合調査に参加し、CICOPA（ICA労働者協同組合委員会）、ECOP（ヨーロッパ労働者協同組合委員会）、イタリア、モンドラゴンを訪れ、法制の新動向など最新情報を入手してきました。この蓄積の上に、イタリア、フランス、モンドラゴンを迎えて、事業団の労働者協同組合国際シンポジウムが開かれようとしています。

他方で中国・社会科学院の張承耀氏、合衆国ウエスタン・ワシントン大学ロバート・マーシャル氏と交流しました。張氏の翻訳で、中国の『国外社科快報』には中西五洲副理事長の「人類の危機」、富沢賢治理事の「労働者協同組合の原則」が掲載されました。また韓国半月信用組合の李健雨（リー・グン・ウー）氏、ハンサルリム・ネットワークの尹亨根（ユン・ヒョン・グン）氏と交流、訪韓と労働者協同組合の講演を期待されています。ベトナムの労働者協同組合づくりの話もあり、アジアの労働者協同組合ネットワークづくりが次のテーマとして浮上してきそうです。

Ⅱ. 研究所の基本性格と課題

1. 「人類の危機と協同」をめぐって

協同総研の第1の課題として、人類の危機を直視し、その克服のために、変革の立場に立った総合的な協同運動の方向を研究所の中心課題として据えてきました。1年間の活動の中で、この課題の展開の方向が次第に明確になってきました。

- ①人類の危機の解明は、それを生み出す資本主義的生産様式等の構造に対する科学的批判にまで徹底されるべきこと。
- ②それを克服するものとして、現代協同運動の理論が確立されるべきこと。
- ③社会が真に必要な労働をおこし、その価値と社会的評価を高めることを中心に技術、企業、地域、社会の対案にまで具体化されなければならないこと。
- ④そのためには、すでに現実に存在するすぐれた草の根の運動を掘り起こし、交流し、その意義を普遍化することがきわめて重要である、という点です。

2. 「協同」の労働と仕事おこしのシンクタンクとして

1年間の活動を通じて、日本の中で、さまざまな場面から協同の労働と仕事おこしへの期待が大きく高まっており、その実現のために積極的な援助を与えてくれる研究者・専門家も数多く存在していることがわかりました。

その領域は、ごみ・資源リサイクル、森林保全、都市環境、農業、福祉、教育・文化、福祉機器の生産など、多岐にわたっています。

その中で、現代の協同運動をすすめていくための重要な研究テーマが、次のように浮上してきました。

- ①福祉、教育、文化などを含めた、新しい協同を支える経営論・組織論

- ②社会サービスや文化を含めた、新しい需要と供給の協同ネットワークのあり方。住民・自治体との関係。
- ③人権と民主主義の立場からの公共と協同の新しい関係。その中での両者の現代的発展。
- ④福祉や国有林保全など、公共部門と協同労働を結ぶ「公協コンプレックス」論。
- ⑤「協同」の中での人間発達、人間性の再生。とりわけ労働の尊厳の回復。

3. タテ割運動を超えた協同のネットワークへ

第3に、研究所が1つの結び目になって、労働組合と協同組合、各種協同組合、中小企業・自営業者・農民と労働者が、従来のタテ割運動を超えて、お互いがヨコに交流し合い、新しい事業と運動の可能性を見出しつつあることです。

- ①労働組合では、国労闘争団、城北地域労働組合、コンピューター・ユニオンの組合員などの中から、労働者協同組合づくりと協同の動きが生まれています。
- ②生協、農協、労金、医療生協など、各種の協同組合の中からも、労働のあり方を見直し、総合的な協同運動に自らの活動を位置付けることに、新しい展望を求める人々が現われています。農業では労働者協同組合そのものが求められています。
- ③中小企業・自営業の協同化と労働者協同組合が、相互に交流し、学び合い、連携を強めようとしています。
- ④それだけに「協同」の現代的で多様なイメージを、多くの人々に伝えていくことがいっそう重要になっています。

4. 地域・自治の再生と協同

最後に、とくに地方の研究者・会員から、地域の自立、自治の再生への熱い思いと、協同運動への期待、これと結びついた研究へ意欲が表明されました。

地方の実践家と研究者の出会い、協同研究と、そこからの情報の発信・交流を何よりも大切にして、地域ネットワーク型の全国的研究所として発展していきたいと思えます。

[参考資料]

※所報『協同の発見』に寄せられた声<要旨・抜粋>

1. 「人類の危機」をめぐって

- ※ガン、糖尿病から過労死に至る「成人病」=変成病の主因は、資本主義的生産様式からくるストレス。協同組合運動を一つの主要環とした、自主的・創造的な生き方を基盤とする社会の創造を（小栗史郎会員）
- ※地域開発・環境問題は、資本主義の無政府的生産の不均等発展の現われ。原理論的再認識と同時に、ゴミ減量化・リサイクルシステムの具体的探求を（橋本了一会員）
- ※「山奥の森林が海の魚を守り育てる」という観点からの植林運動がある。全国各地で起こっている隠れた労働者、協同組合運動にもっと光をあて、それらの持っている価値を評価し、普遍化し、協同組合間の協同を幅広く形成していくこと（矢吹紀人会員）
- ※東芝アンペックス争議をアメリカやカナダの労働者に伝え、感動を呼んだ。民衆の側がメディアを活用

し、国際交流を。(都筑建会員)

※「協同の理想にもとづく新世界秩序づくりへの貢献を」(岡真人会員)

2. さまざまな場面からの協同の仕事おこしへの期待

1) 環境問題

※営利主義的国有林経営が破綻し、環境保全機能をまっとうできなくなっている。労働者協同組合と住民の協同による国有林の保全が重要に(菊間満会員)

※長野では生協などが中心になって、リゾート乱開発に対し、水源地確保条例制定運動を推進(祖父江哲一会員)

※東京汐留など旧国鉄跡地の利用法に対する対案運動など、住いからまちづくりまで協同が求められている(千代崎一夫会員)

※クリーンエネルギーを地域コミュニティで活用できる制度づくりを(勝部欣一会員)

※「適正技術」の地域からの対案、アジア連帯、若い世代への継承を(宇井純会員)

※日本最大の病原体・遺伝子組み替え実験施設である予研=予防衛生研究所の新宿戸山への移転に反対し、史上最大のバイオ裁判闘争を進めている(芝田進午会員)

2) 福祉の再生

※在宅介護者に対するケアミニマム(公的責任範囲)を明確にし、住民の力で地域の中に在宅ケア体制をつくり、公共的サービスの形成を(太田貞司会員)

※生協、共作連、事業団などの自主的・能動的・協同的な福祉事業運動が福祉の民主的再生に果たす現実的可能性を研究すべきだ(鈴木勉会員)

※長野厚生連労組が中心となり、小諸・北佐久地域で、現実に住民の力で、中学校区単位に高齢者デイケア施設を実現(依田発夫会員)

※家政婦協会を超える労働者協同組合のヘルパー集団を(副島洋明会員)

※自主研修を中心としたヘルパーの養成と専門労働としての確立を。権利としての福祉を世論に高めることを研究所の課題に(木下安子会員)

3) 教育と文化の協同

※高校生平和ゼミナールでは、高校生が現代史を自ら学び、調べ、表現し、その中で自己変革を遂げている(山下正寿会員)

※少人数教育で生徒が各自のテーマを持ち、労働体験と地域の人々の生活の知恵から学んで、たくましく生きていく力を身に付けさせたい(黄柳野高校・神谷吉保氏)

※地域で直面している問題を学ぶ生活文化・地域協同研究会を発足(増田アツミ会員)

※行政や市民団体とのつながりの中で子ども劇場の新たな飛躍が(吉村省吾会員)

3. タテ割超えた総合協同運動へ

1) 労組から

※国労闘争団の中から、労働者協同組合の志向が生まれている。今後も協力を(国労・小島忠夫氏)

※個人加盟の城北地域労働組合で、退職、失業、企業経営の危機に見舞われた仲間のために労働者協同組合づくりに踏み出そうとしている(外谷富二男・細田隆司会員)

※コンピューター・ユニオンから、ソフトウェア事業協同組合の構想(辻卓男会員)

※印刷労働組合で技術革新への対応・技術教育が、土建では高齢者・障害者が住める住宅・まちづくりな

どが課題に（労働運動研究会・涌井謙一氏）

※税務労働者も、やりがいある仕事のために、相互の協同と、他産業労働者、納税者との協同を願っている（増田晃会員）

2) 協同組合から

※地域の主人公になるための部門を超えた協同組合の協同と、職員の運営参加・労働の見直しに生協の発展方向が（半田守孝会員）

※農協組合員・労働者と消費者運動の共同行動に農業再生の活路（武田道隆会員）

※「食糧の生産と消費を結ぶ研究会」を続けている（石井正江会員）

※抗アレルギー食品の販売・製造を通じて農家、消費者、医療生協とのつながりを創り出している（長野事業団・鈴木友子氏）

※協同の理念と経済民主主義を目指す新しい社会システム構築の運動と関わる中にこそ労金の協同組合運動としての展望が（川上賢三会員）

※医療生協の発展は目覚ましい。職員の労働と教育を協同的なものに高め、地域のくらしのネットワークづくりを進めることでいっそうの発展の展望が（中屋重勝会員）

※フランスにおける中小企業の協同化と労働者協同組合を包含するものとしてSCOPに注目（野松敏雄会員）

3) ビジョンと理論

※若者に魅力的な「協同」のビジョンを（斉藤玲子会員）

※「民主的」なる言葉の吟味、労働の評価・配分システムの研究を（柳沢敏勝会員）

4. 地域・自治の再生と協同

※国労熊本地本と地域住民の共闘によって「高森線」が三セクターとして再開。地方が中央に依存せず自立していける道を探ることが労組としても重要（嵯峨一郎会員）

※地方の協同の事例を掘り起こし、地域社会・経済との関わりの中で主体形成や運動のあり方を明らかにし、新たな協同の運動に生かしてゆくことは、地方研究者の課題（阿部誠会員）

※「東京と地方の情報格差」を、環境問題などでの地方の運動の盛り上がりと、協同組合間提携の発展に依拠して克服していきたい（瀧田隆夫会員）

※団体自治が収奪され、行政能力が低下しただけでなく、住民自治が後退し、自治体労働者の自治意識が形骸化している。参加・協同・自治の新たな展開を（橋本了一会員）